



七
柏
集

三

5

2237



利5
2.297
4止



乾坤佈真行

蒼海をわえそ芥子の咲ふり
風多 旭乃千身すしき
実人と或士とるくく大鳥色
との買ふ廊は腰をくちて
くれお乃西瓜小月の瓜と重
すゝ内取の砂も洗を以



蓼太



牛歌
鳥桂
隨賀
梅素
太

如^ウ有^ハ女^ノ扇^ヲ也^{取^ル所^ノ人}
新^ク拭^ク縁^ト鑿^ト鏡^ノ
裡^ヲもあ^らう^くと^{志^ス鏡^ヲを}
研^クハ^{鏡^ヲを}ふ^り着^近
餘^ノ入^ノ機^{不^知象^{小^六月}}
誰^をう^う屋^を摺^を亡^骸
去^ルぬ^{火^をさ}ち^も炬^を振^也
筆^{菽^{北^三風^を詠^あ}}

賀 素 歌 太 素 歌 桂 賀

川^{揚^ノ斗^不鐘^ノ菰^{詠^ク}}
重^ク舟^ノ誰^{波^乃死^{神^{符^を}}}
月^{花^と姉^り由^く嵐^之志^出}
た^{我^と女^がか^く子^乃物^{杞^飯}}
茶^{伽^{柵^乃桶^を}}
砥^とり^の研^{通^子}岩^倉
人^{目^を死^心車^の捲^きれ}
う^しと^{侍^人}子^{我^を}よ^らる

歌 太 桂 賀 素 歌 太 桂

千町回ふたはもいふとさき
疫癘除の伝連よき竹
只ひとすかきりもあとの旅とさき
襟年隠しき討死の骨
波あれの五合子とさす帆を舟
空きむ秋舟天城障る
西東指は月乃亭自振
魂洗ふき星とがけはる

素賀桂太賀素桂歌

^{十ウ}
つし津波ふる水く後もおとあなり
夏とハんえらあ蚕のふりまひ
ははのさり水とさむ山ろろ
さあまほめ川筆と二日路
玉川の鯉も折ろく志の若
とおほく小竹の雪

太賀素桂太賀素桂歌執筆

環流亭の菊乃ふまふま

蓼太

乞葉よあやしの世あかりとむ
 盃たえぬ月 忠 船 夕 一 兆
 初汐の擔桶浮をうり赤まき
 驛路乃鈴ハ何の血使 百 兆
 小刀も添きまき出以硯箱 兆
 縮き下き縮乃目く川里 太

愧追く門不結新ま川紫言
 泣身右と左と腰も才かや
 湯如城も借き志津子海ま
 疾不あは流ハ結納や川た
 揚屋う懸う園一片多うり
 年の責と三尺乃雪
 松ゆふ云云乃遷坐神く
 和申こ何々 銀 兆 猛

太 兆 我 秀 兆 太 秀 我

逢ハ又不通の存るゝ押拭ハ
 且那るゝひる花の散るゝと
 妻の目と依之座を答持母
 確る獲の鯉を福引
 する⁺到ぬ赤裳よはら子女の童
 手燭透せとれひるゝ君
 造化のばり^節をくゝ玉子遊
 比叡り健日ハあれ鏡山

太 北 峩 秀 北 太 秀 峩

くらぬとそそを控る防あは
 何さるゝ痛さるゝ酒の毒子
 深漬の罌子波遊と来二儀
 不香黄ひる雪の表並
 組合るゝるゝ馬子とくゝれ
 干翹乃跡の臭き夕ささ
 新遊るゝ月ハ此床儿持ある
 本草寺の是らかりと也

峩 北 太 秀 北 太 秀 峩

十ウ
 毛々々々と毛羽もたよく旅裕
 多小唐大と物々々々之
 笑々々氷も厨のときり庭
 ありと毎日何か一の存
 年々小折もささひ花ハ云
 弥生々々川十分の春
 秀 太 北 太 北 我 北

孤猿洞真行

蓼太

名物や雪のたぬきもみゆ下
 毛々々かきさるる冬の夕暮
 漆指とある月々々々提させ
 知行至の柄とよささひ
 顔もたつ月乃一字掃ちまを
 山寂寞とともささささみ
 素人 蓼阿 雪貢 阿 太

言翁^ウ也^ニ出^カ彩^キを^クく^ク秋^ノの^季
所^中年^をて^仲終^を時^めく
六^つの^湯治^を送^る小^挑灯
麻^織乃^修子^画師^の羽^二重
有^遠心^とを^度さ^る交^者
よ^く系^動の^葛流^跡つ^き
着^る衣^とと^相を^入積^小ね^ん
角^力小^ひと^とを^きか^つ男

頁 人 太 阿 人 頁 太

何^を其^市子^神買^子あ^る世^帯
只^くを^登の^隣む^つま^し
双^六の^簀て^旅する^は此^者
尾^乃出^孫よ^くと^記仇^措
+ 漁^倉の^むろ^し概^子降^くろ^し
二^ハ化^物乃^火て^もる^りし
古^きの^よも^とを^ある^はの^云平^傳
飽^一は^いと^酒 女^心 賭

頁 人 太 阿 人 頁 太

11511

悠然とる庵のまじりては
かりて年のたゞのまじり
次食^{シキ}のまじりては松入のまじり
吉水院を荒成者の高
消かゝる松小便のまじり
松もや傳るゝまじり
吾のれ月まじり入るゝまじり
もまじり暑き新緑のまじり

頁 人 太 頁 阿 太 頁 人 太 頁

^十吾のまじりては地まじり
山くかまじり小家の百軒
まじりてはまじりの本
刀のまじりてはまじり
糸拵のまじりてはまじり
馬のまじりてはまじり

太 阿 人 頁 太 阿 人 頁

芙蓉園真行

名月や流石も楽も船
 連る船のちりも由る岩
 大命
 風もく小舟も秋の露ちりく
 芙蓉
 門守もく履使もみる
 太
 出這入を奉別多る露のちり
 扁
 沈小踵をよもを
 行騰
 蓉

位持あゝ當坐不るの祝若
 太
 沈赤くみく仕りふ十経香
 扁
 頭も蠅を遊子舟と笑く人
 蓉
 憂夏のねをさうたる昔的
 太
 さかけ乃弱を袂も忘れ
 扁
 起外訓し物下の方
 蓉
 釣柿小鳥を志るお月ね
 太
 秋ひやかみゆもく乃孫
 扁

芳しくれ後芝の漏出く 蓉
 室を都と本曾乃山陰 太
 半子跋猿ハ遊れく志の雪 扁
 まゝの春風の君ハ十三 太
 十
 教 賀まゝくく小寐する帆柱 蓉
 仇一歩の海鳥く唾のきく之 太
 帳を火吹くもむぬ大裾 蓉

志の竹入たをむ斗老く 扁
 女居くくお場あつて 太
 汲ひまを井の輪乃氷粒唾碎き 蓉
 草卧をくく文る庚申 扁
 ちくくと海の底をく音ハ 太
 ひたよの嘆くハ田舎儒者 蓉
 人別の判をくく梅の月 扁
 糸とる。菘や新給乃核 全

ナリ
 霜刻の俄あたる秋の氷 大
 足手を室よ喧嘩んふり 蓉
 炭柄の雨いとりぬ拙さし 扁
 簾乃 獲を阿ある摺鉢 太
 二三日花のあき日を笑合せ 蓉
 風の去るは鏡し 銀屏 扁

乾坤儀真行

蓼太

神此入之ぬ時遊るく秋風雲雀
 衣履の中乃葉摘 葉 摘 財峨
 室合も拂ふく桂やいぬん 車童
 麻よとの待ふまきあ一打 方壺
 とれをる行らまはさる雨の月 悟牛
 翌之牽我むる弱のきり結 太

新^ウ年^ウ身^ウ次^ウ食^ウ後^ウ心^ウの^ウ三^ウ拵^ウ半^ウ
女^ウち^ウの^ウ乃^ウ家^ウ不^ウ津^ウの^ウ名^ウ
後^ウの^ウ襦^ウ踏^ウき^ウの^ウ一^ウ
花^ウ抽^ウ折^ウ集^ウ家^ウ不^ウ入^ウ高^ウ
化^ウ那^ウ女^ウを^ウま^ウを^ウ忘^ウの^ウ遊^ウを^ウん
遷^ウも^ウあ^ウ一^ウは^ウ福^ウ原^ウと^ウ倦^ウく
と^ウり^ウく^ウ不^ウ月^ウ欠^ウ信^ウの^ウま^ウの^ウ小^ウ子^ウ
す^ウ今^ウの^ウ一^ウは^ウ六^ウト^ウ治^ウ一^ウ荒^ウ

壺 童 峨 太 牛 峨 童 壺

十
林^十麻^十の^十酒^十や^十太^十鼓^十小^十秋^十の^十夕^十
を^十江^十の^十湖^十乃^十只^十あ^十ま^十か^十風^十
あ^十ま^十妻^十の^十夕^十鼓^十く^十小^十鼓^十ら^十も^十
鏡^十お^十の^十ろ^十り^十中^十息^十く^十け^十も^十あ^十く^十
甚^十を^十酒^十一^十石^十の^十唐^十櫃^十拵^十器^十一^十
ま^十の^十五^十軒^十家^十よ^十ま^十の^十新^十回^十
世^十之^十の^十療^十治^十形^十ひ^十去^十を^十の^十
老^十を^十ま^十り^十の^十雪^十乃^十

壺 太 牛 壺 童 峨 太 牛

十一
十二

醴^{アマサケ}

人々冬の轆^{ツクミ}乃餅^{ツクミ}小列^{ツクミ}
 安井ありりの古寺終く
 行あつて古懸^{ツクミ}なう一理居
 猪^{ツクミ}細^{ツクミ}鞆^{ツクミ}乃むく女房
 中垣とき川と指南の小薙刀
 大和あつてき^{ツクミ}伊賀乃城下
 照月のを杖^{ツクミ}持^{ツクミ}おとあつて^{ツクミ}終
 将^{ツクミ}お^{ツクミ}よ^{ツクミ}年^{ツクミ}を^{ツクミ}終^{ツクミ}只^{ツクミ}君^{ツクミ}也^{ツクミ}

童 峨 牛 壺 童 峨 太 牛 壺 童

漸と身ももつ^{ツクミ}冬^{ツクミ}北^{ツクミ}秋^{ツクミ}かり^{ツクミ}起
 る^{ツクミ}て^{ツクミ}こ^{ツクミ}り^{ツクミ}な^{ツクミ}き^{ツクミ}非^{ツクミ}時^{ツクミ}の^{ツクミ}由^{ツクミ}迎
 赤^{ツクミ}よ^{ツクミ}く^{ツクミ}波^{ツクミ}の^{ツクミ}七^{ツクミ}里^{ツクミ}乃^{ツクミ}溪^{ツクミ}ひ^{ツクミ}き^{ツクミ}
 さ^{ツクミ}え^{ツクミ}み^{ツクミ}ら^{ツクミ}て^{ツクミ}ふ^{ツクミ}あ^{ツクミ}い^{ツクミ}折^{ツクミ}く
 安^{ツクミ}志^{ツクミ}か^{ツクミ}き^{ツクミ}君^{ツクミ}ら^{ツクミ}花^{ツクミ}身^{ツクミ}を^{ツクミ}待^{ツクミ}斗
 葦^{ツクミ}ー^{ツクミ}ー^{ツクミ}き^{ツクミ}る^{ツクミ}糸^{ツクミ}乃^{ツクミ}塵
 執筆

童 峨 牛 壺 童 峨 太 牛 壺 童

櫻溪舎真行

蓼太

曉の日和ふたりぬ秋の夕

伊勢

顔さしそひる月乃月

理玉

田楽や新酒の所もをわけて

文母

ほももら細工乃糸子追り

牛飲

足輕の在所を譲る友をを

阿人

年よ端ある雪の夕く逢

太

り川もあはれ味小條もはるり

玉

雲もく身ともあはぬお駕

母

幸かたきやわたり小敷女を結ぶまひ

飲

四ッの土圭は奥乃は月さる

人

おかけ乃急ぎをそつと垂垂し

太

仏子祈りし小入るる配當

玉

新鞍とく第附る小堂の月

人

岩削り戸田の秋あり

飲

遷宮ふまをしくとま大工
小粒あつとをハッまをたうる
をいよおよぶの系抱縁延一
意年いふ子と甲斐女の山く
信長の使者もたうる田所あえ
是乃よか一乃あつ川珊瑚珠
棟上乃結志とまると観一
念佛小が一と坂も和しく

母太玉 人太母 飲玉

今あまの柳の腰と戯まうる
火桶を源乃内侍ま一りふ
やうはと空のはく日たすを我れ
柱かけとある柱や鬼齒朶
一と降り同し枕とちやう風
船は夕帆をと只五合祿宜
月の君とあまの住山一也
車北牛と秋のみとる

人太母 飲玉 人飲母

唐紙り此樂と何者也
 年々をきて居るを
 望むも花はまきれはるる
 膚くの歌乃秋海色
 太玉人母太飲

乾坤儀真行

蓼太

里人の云はる由疾道の月
 縮も思ひ乃穂小出る時
 旅衣わさむまをるを分分
 振むけを又吹のそもちし
 構年屋あくる捲すきま
 うさくれちるの夕梅雨の夕
 車童 牛歌 烏桂 方壺 文母

索かゝる帆繩は童子夷とも
 かい津あつてふ物に傾城
 讀せしとまきれくの妹なま
 葦塚恥る陳乃川際
 借し多福まき雪の霞たは
 あまひまきしと葉は庭に
 花も又まきしと葉は庭に
 扱をふ味ぬあまの月乃夷とも

隨賀 悟牛 財我 梅素 桂 太 母 我

復も今たはらあゆりの男や
 勅使たるかふりまは海
 己まねりまよふまは花の女
 世を糸柱の備玉一尺
 十
 こまきしとまきれくの妹なま
 味嚼吸との小上坐さたま
 鎖をとく浪に船取取
 香隠貸る面目も如し

素 壺 童 賀 牛 歌 賀 我

世俗ソトありねん
は注ツ何ニあり

脊ホイ身シン不フ弓キウ矢ヤを控コくク景ケイ帝テイ

昂ホウくクてテ磨マ斗ト平ヘイ一イツ世セ後ゴ

公コウ妙ミョウ子シ只ジ機キのノあアとトらラり

越エツのノ卯ウ月ゲツ乃ノ今イマこコのノ日ニチ是シ梅バイ

凡ボウ喜キのノ淺センくク旅リョ屋エ乃ノ夏カ床トウ

消シユウてテはハくクはハくク新シンとト其シ女メ

桂ケイ男ノウ乃ノいイとト是シ庭テイのノ戲キとト

焚フキくク磬ケイ而ニはハ松ソウ葉エフ推ツイ棗ソウ

壺

素

童

母

牛飲

百溪

桂

飲

螺リのノ出デくク片ヘ乃ノれレ山サンのノ秋アキ乃ノれ

連レンなりニ一イツ焉ニ心シンとト乃ノ竹チクくク人ニン

天テン蓋ガイをヲ梵フツ論ロンをヲ是シ導ドウくク人ニン

内ナイ鏡キョウ越エツくク乃ノくク乃ノ龍リウ川ケン流リウ

笑シヤウ花カ不フ紅コウよヨくク乃ノくク乃ノ夕セキあアがガ日ニチ

こコらラのノ西セイくク乃ノ西セイもモ雲ウン風フウ

溪

牛

歌

飲

太

溪

三巴齋真行

蓼太

水玉や木綿の糸流るひよりの
 山夕をえく浪者の月以鳴
 雲老の千夕中級さぬく小
 舟よく晝画二枚のうつく
 駕かりく及う傘ハ五のや
 かつく枯る暮の暮町飲

古きふの温泉ふねを屋は血を流し合
 娘さうりもはひ葦子きり
 仇酒を津とめくまをる二生友
 入帆日和小糸もあぬとも
 白くくの立きりく雲の峯
 始焚谷乃地獄をまき
 体の子まきく葦心ちる塔をとり
 綱をくれの武士とらんえたり
 太 飲 鳴 太 飲 鳴 太 飲 鳴

いささしの源八堤漕りかき
小面年なり一統社の月
獨海へ起る宿垂る花北交
妻此の河勢乃三里百牡
侍々を八重の河路乃古産抽
紀の山陰此一家死く
白袷志る強飯の新流美
自利の底乃る有る人母々
飲 鳴 太 飲 全 鳴 太 飲

本陳の暮も結り以明を有き
なげ乃情の名さくす々々
大系を賽とこらと勢あり
雲層き松の車後ありま
澄のなる顔ハさく油標無
引導あを吹きむれく
不人のやと月代も有塗障子
守る板室も有聖の御坐船
飲 鳴 太 飲 鳴 太 飲 鳴 太

深^{ナリ}色乃秋も結さうありや毎
 五士衣の下ふじり毎
 込入る襖かゝる藤川起し
 交代部屋の雨共はせきく
 今間の冷気さへ花乃四里四方
 むくり虫閑き能時律風
 太 飲 鳴 太 飲 執筆

雪翅籠真行

蓼太

欠月此鏡練しんさ何き園
 田毎一花さる花の螢火 鳴臯
 還幸乃先追ふすと松風平 杖芥
 阿比心葉まゝる所とほし 五山嶺
 芥入る具是の解乃いとねをる 臯
 妻此さしむきの氷ゆゑい 太

蘇々 福 特 足 也 此 物 々 々 々
 層 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 便 和 小 字 系 履 乃 量 々 々 々 々
 葉 月 風 の 比 目 遠 々 々 々 々
 あ 々 々 日 と 留 々 々 々 々 々 々 々 々
 後 風 古 記 二 巻 々 々 々 々 々 々 々
 斤 意 地 小 物 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

又 上 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 横 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 鴨 笛 乃 系 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 刺 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 令 義 小 吳 足 の 履 音 々 々 々 々 々 々
 あ 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 糸 物 小 宜 花 醫 者 の 々 々 々 々 々 々
 麦 小 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

二五二

翠月舎真行

琴太

夜盤や客の縁小紅走る屋
 月乃庭井よ夏忘きあ 魯洲
 松かーハ一むる此障持多 流光
 存す下侍上供奉入をのく 斑石
 是あ小極袋の如ーヤ紙 季令
 桐橋かけー舟乃あう場 月窓

鯉子干風のさむーら夏得ー 洲
 写わて三年系此爪あき 太
 絶解く更小虫ささ袖あさひ 石
 いまや受戒乃盥利刀 光
 碎るる葉を記遊の九折 窓
 先是代忠たふまをさし 令
 将くと月の桂乃瘦おとふ 太
 清沈よ入る椽此麩捧 石

此の如く乃雲も奪ひ非紋白
 尻と疵氣ふりや世の中
 先と何ぞおれつ糸の尾まき
 ひろくハ跡一風乃貝よせ
 跡もと眠りて千く此甚や種人
 棟木の條はゆ糸巾此葉
 陶の古とる山と塔あり
 晴れた鼻月乃叢のきぬく
 令 洲 太 石 光 忘 洲 令

根入る境下地をたを自製
 帆は風ちち乃賛田ぬく
 額もねハ不のく此樹を
 神はけきせと化物も出ん
 木のありは木小拙と五十進
 檜一葉と跡の候子
 寺のかわき急次舟下此月
 在室おねえる酒の碑き
 光 忘 石 光 太 令 洲

ナウ

人^{ナウ}や阿^{ナウ}人^{ナウ}と秋の間^{ナウ}五^{ナウ}葉^{ナウ}の^{ナウ}省^{ナウ}
 浪^{ナウ}を^{ナウ}す^{ナウ}れ^{ナウ}く^{ナウ}幸^{ナウ}小^{ナウ}安^{ナウ}宅^{ナウ}丸^{ナウ}
 夕^{ナウ}風^{ナウ}の^{ナウ}斜^{ナウ}子^{ナウ}居^{ナウ}る^{ナウ}日^{ナウ}の^{ナウ}返^{ナウ}く^{ナウ}
 心^{ナウ}て^{ナウ}無^{ナウ}常^{ナウ}と^{ナウ}正^{ナウ}と^{ナウ}す^{ナウ}候^{ナウ}
 志^{ナウ}志^{ナウ}と^{ナウ}一^{ナウ}若^{ナウ}麦^{ナウ}少^{ナウ}て^{ナウ}る^{ナウ}石^{ナウ}柵^{ナウ}
 係^{ナウ}生^{ナウ}く^{ナウ}り^{ナウ}結^{ナウ}後^{ナウ}も^{ナウ}守^{ナウ}之^{ナウ}心^{ナウ}
 光
 忘
 例
 令
 石
 執筆

雪丸舎真行

蓼太

一^{ナウ}と^{ナウ}と^{ナウ}と^{ナウ}月^{ナウ}を^{ナウ}我^{ナウ}り^{ナウ}つ^{ナウ}連^{ナウ}ち^{ナウ}る^{ナウ}様^{ナウ}
 お^{ナウ}ね^{ナウ}く^{ナウ}か^{ナウ}ん^{ナウ}く^{ナウ}の^{ナウ}鞠^{ナウ}中^{ナウ}に^{ナウ}舞^{ナウ}は^{ナウ}る^{ナウ}
 秋^{ナウ}ま^{ナウ}る^{ナウ}女^{ナウ}麦^{ナウ}振^{ナウ}舞^{ナウ}ふ^{ナウ}多^{ナウ}く^{ナウ}正^{ナウ}と^{ナウ}
 足^{ナウ}跡^{ナウ}を^{ナウ}走^{ナウ}の^{ナウ}め^{ナウ}を^{ナウ}た^{ナウ}く^{ナウ}く^{ナウ}
 石^{ナウ}多^{ナウ}く^{ナウ}む^{ナウ}櫓^{ナウ}ま^{ナウ}さ^{ナウ}く^{ナウ}か^{ナウ}よ^{ナウ}出^{ナウ}立^{ナウ}より^{ナウ}
 暮^{ナウ}去^{ナウ}ら^{ナウ}く^{ナウ}と^{ナウ}ま^{ナウ}ね^{ナウ}の^{ナウ}的^{ナウ}の^{ナウ}母^{ナウ}の^{ナウ}
 花
 太
 百
 赤
 花
 機

日糸乃唇こゆる 普門品
 男ろくしと母もともく
 是的不対む事の種ろり何を
 卯 月えり乃風の信をく
 卵を心つく焙煖子菓子昆布
 寮 付合乃るる子よ枕
 人まよる麻の根をろり置るる
 月く信るきて深く白梅
 太 花 太 花 太 花 太 花
 百爾 太 花 太 花 太 花 太 花

折く小舌く川新海一糸鏡
 別く中野の宿ハさくしん
 咲系乃何く流生を時々
 漸も戸無浪小さえく人
 熟とまゝ二寸小舟ぬ小さく
 去 産 細工 入りゆく 髪
 捕縄をあそむとく云ゆる
 曠う海くも雪のすく系
 太 花 太 花 太 花 太 花
 爾 機 太 爾 機 太 爾 機

得月も又よのうハ乃らるれ就
 車かりれと牛のふ孩姪
 人頼ふたうぬ苔枯下志川
 由瘦はくく兜めさ勢執
 切糸の浮控くねく琵琶はじ
 まる飯殿ふらるる神流
 西ひくくく無月の柳角力
 舞踏うめく小苔妻乃とる喰
 花 太 爾 花 棧 爾 太 花

^十
 二三本尋れ扇を掃ちる字
 旭ふらきゆく大系回答
 糸物の細代もあけ散とられ
 ちらくくくもひく川高
 囊中の残り酒買子花の蔭
 人來といふ事の隠れ家
 棧 花 棧 爾 太 棧

みくろ子何事記む物類
 妻や紫胡子花乃谷く
 常如月日乃五輪とら
 妻まゝの終水麻のひき
 十 糸の間ふも思て妻者乃長袴
 美入の念孫年首途川する
 玉妻此の本影少すす
 荒山をく機よ和く
 爾 花 太 機 花 爾 太 機

糸の川をよまひのれ神
 又のまゝささく老乃長はく
 妹文よ湯治のともよ妻者ひより
 食後乃謡多ハきく
 くり出しく位牌やて
 厚背葉小月ハとら
 織多てふ色尺す暮乃蒲苙
 神子尾廻の鴨入く
 爾 花 太 機 爾 花 太 機

蒙^{ナリ}求の佳れと杜律乃子番紙
 四五本栴々窓よは君
 まれくは海草川の帆をよ
 十念より乃栴りおとえ
 自らどく折も之は花乃聖
 其まより思恙其の古路
 花 爾 太 機 爾 太

石中堂真行

悠々乃牡丹ハ伽羅も為る
 酒多きは花の月天府
 有免る車大乃舟織者多
 富屋
 あやめ眼鏡を掛つて阿久
 牆^ク紙は喰ふをくも永き日下府
 地を揺るり雨乃やあ吹 太

久き寺へ程よき多杖あり
耳より海辞のなきて叶りぬ
未だの漢和乃洞子附篇一
たつよ山を越る雪雲府
瓦前より水多ぬくと鏡提
兔角法師乃骨打帝
大津を送りの舟子五六人
お合駕の骨牌ほり如乳
屋

藪やちれ花も又花蓋
吾乃腕も塚の古物
神傳の月乃胡蝶の愛人
醒ぬくと水よ送よる府
+ 憂時ハ隠望愛乃切目録
筆さく枯る書寫此みされ
嫁婿と愛しられと惚ふく
囚られ人の品定せん
太屋人太屋人

加々木乃圓の東ふあふこそ府
 坂遣寺いひよま此流々
 五十串の舟喜や久挿
 袂を潜く小坊を
 整う一乃蕎麦を煮う左々
 遠垣越よ本城刈里府
 夕鴨ふ立捲きて月ひとり
 九人の鮎乃るる去帳と繰
 人 太 人 屋 太 人

^{十ウ}
 奇かゝる板小頭痛くらなる
 きれよよらるる海原の風府
 あらけ即貢乃魚の尺擗て
 五々申流連乃孰信多く
 袖返一一くく花の越天樂府
 ときほしうらききまき入徳多
 執筆

望天樓兵行

蓼太

山里や枕ふかけたる泣者
 せしむらくくようひを相亦
 強此色よまの夕初を磨く
 きの子乃よ涙ふ面を字
 むる居てたるも此もよの秋為
 龍之麻よ月乃玉ゆらぐ

左良 東序 歡夫 太

道も真の物をと奉るる一
 素袍まを脱し風やあつん
 爰はあつてふしう青き
 とのく命法陀よかけら
 寺ぬ火乃細ちと形進を山
 義理ある娘ゆきやとせぬ
 寐これ湯漬すあつ川原
 手燭よ雪の相嵐

來 良 序 太 丈 來 良 序

廣庭に破船の蒲荷積をる庭
 酒乃く吼る荒夷も
 三日月入半弓提て花の川
 まゝの為やめ喜の赤芝
 調布に笠を川里乃さし杭
 尺子中環の米とくゆく
 やきとまの十なるまの庭
 風呂あうけく翌乃蓮菜
 来良太席夫

痛る時も久能を松の伏又あ
 七ふるくと老ハゆふくと
 盗人の窟乃奥此是すこれ
 復を喜節と梅も梅と
 足着るる行衣入雨の乾之
 くりぬきぬ粥乃猫古
 足明のちや半はく造及
 きのふの転踏るまの垣乃寄
 来席夫来良太席夫

本使ナリのまゝの葉きし一已此ちり家
 うんはくともさくよん葉い多く
 手引くともふて度は駕着
 山振うる畝傍年在し
 所一や今年ハ花はほくま
 引ゆる入春此ちくま
 良 太 來 席 夫 執筆

老鶯巢真行

蓼太

くらやふとのいなりや庭乃秋
 友まきくし山里此月
 今年酒五斗乃瓢子罍斗付て
 便も牛々走川の有りり
 庭ありきくし神とまき色ぬと
 古号久しき松の中蔭
 蒼山 汀雨 分枝 夫水 虚舟

棟木うらむけて氏子乃幸進札
ありとめてきりゆき 誓
振舞も昔ありし此根来振
う川より梅乃冬至よりきす
何糸と田中子孫を塚いと川
葉内まきしん 由 響はら
月海へ待たの依殿乃ら蕙
あふふ生ふる 暮の葉北角

山 太 水 枝 太 舟 雨 山

あふくし啼ききりし縁遠
関と名古曾乃手取た白く
ふれり紐とく 琵琶の花結ひ
嗚呼とくせりし川も陽を
奥箱の命きりし春此の夢
午時を限入 教射 二十
只今と別火の夕餉焚ありし
川きりて青き 藤乃 飯草

太 山 雨 舟 枝 水 舟 雨 太 山

二拾三

三十一

日くらみよの路筑紫乃旅やはせ
くさくさ涙の福やふゆき
裁板ふ継後志ろあやうらうき
およと曆乃冬一東風ふ
臨甕のやうく幸き船夷はに
し川乃まな帯解き糸る
二腰のくさ世あき黄此月
くのむし共者乃おれあふぬ

枝氷雨舟太枝山

雪乃と降をれてと雪と並あゆり
連ゆりかつれ志賀の山越
むよよのあそとみ合ぬさしほ
雨頼乃戸とやお文ふさや
慶雲此花の古有それなうら
ひさす仙よたとさほ舞

枝氷山太舟雨

松濤亭真行

蓼太

今宵の如く松の葉はる雨代
 あけく冬まれ寒乃小面 吏中
 馬帽子もさつとさかり酒酌て 子真
 いさ借る糸を足下あつて 百鏡
 ありとぞ小絶く如くひ橋の月 五麗
 西風とともやん九く乃庖下 宜夢

伊勢底北意者掛ふ盆走く 中
 さおふ朱柳の種古ひきく 太
 儚啼火と河ひ乃星あがり 浚
 天窓かきへく薦小蹴やれ 真
 庭よりと入ゆる妹脊乃風をり 麦
 旭さひしき巻に此初浪 繁
 橋の葉ふとくうぬ第瓦をり 真
 道安さく不行定てな 中

神波とらき出仕乃々河色口
 降きく雪と志の元日
 水あびる月此挂ると一男
 妻やむしと角力ととらん
 十
 たつ島のむ来乃松山あけ多て
 門よりまゝせらる 駕此空蝉
 鸚鵡も高ひ口をさう勢たり
 ちの海もあけ乃鬘は星霜

太 麦 澆 魚 鱗 鏡 麦 太

舟乃河小初夜と好おとの水元哉
 波乃佃名鬼と住まて
 風のなみ時もすくま友燐
 おとくく嘘を左友さいとと
 ちりともれも古むき記の曇華院
 舟~~~~~とせと白上木樺
 三河居つ新月の結小おと人
 控り涼るや河沙乃舟

澆 太 鱗 中 真 麦 中 鱗

十ウ
 書同く得く城乃屋氣樓
 日和お白くを今くろま
 あかくはる阿つ風呂好の朝くま
 市きくらゆれ魚屋の吸声
 張屋乃出捨有く人花う月
 薄忌揃くく人の三月
 築 麦 真 太 中 流

東花房真行

換滋不日永きあのり来式
 い川う出そあさあう記乃月
 列尼北花の袂や子月か人
 十九やちたらら乃笑屋はさよ
 うたれあまいんさるの岩流り
 あさうは菜屋の妻ふかしく
 夜免 夜梧 五柞 兔 太

蓼太

ウ
たはるの古橋はゆる寝かこ
あゝえろ二日物いぢぬ事
置の棚たきそまもろくも
鶴乃かろく石もかろくも
世の蒼をさけく流る衣川
能くして後乃も生
袖より多郭巨る釜の抽ひし
宿車所のさむき

轉

太 免 拵 拵 免 太 拵 拵

かき目をさきく月乃古神つ
経績をくす船の浪る勢
川ゆふちやえる花乃橋人
小船をさきみく向ふ野置
日と西よめくうての乃をかく
鳥をとろく無大仙の棟
目もれぬや小判の階をむ
二代片くぬ七乃名人

拵 太 拵 拵 免 太 拵 拵

さゆひひんるの仕たてく鞆院
 高 繁 海もよそ 飯の籠子状
 な海中小紐とくく記玉手は虫
 目しと中 斤本小虫とくき
 置るの外ハ雨す川 羊あをり
 きられ履もまよし小冊く物る居
 迷ひ子の宜由く月ふめりあひ
 皆 走川ありと雪方の濡きぬ
 兔 拵 太 拵 兔 太 拵 兔

弱ナリの若穂 為林あきむくひり
 くるのやうもるあるう法を重
 引る海き弓とふさく大八分
 ちや 厚 瘡 もくする比ふ
 子靴の鞋となわをよまよの字
 所乃 裏あく糸のいとあふ
 兔 拵 太 拵 兔 拵 太 拵

十日登真行

110

111

好日菴真行

厚りの子や月の中より為るは

蓼太

此年男も折ふ松を

免所

梅柙多よ吹薨さうぬく年

南瓜

駄荷を追込園乃下口

信賀

ぬる畑を日の終さふ迄は

晋江

所走乃果も庭にすまは

玉危

表奥地の新後より下から

町

ちとあきつれと西の大寺

太

榎信き足喰ふま鞋履走

賀

拐り〜のころ元結を

瓜

圃より乃庭乃不徳と親ん

危

面のおまきの味石のく

江

ゆくあふ月を懐さぬ葉掛

太

年貢の卵乃為み

所

上巻三
下巻三
田十四

走じりて君ら出先の露拂ひ
 大座を袖巾にきり
 隠れきり方なく志は明を志
 白ん乙鳥り了整れぬる
 十 妻の海鬼なきも山は船をき
 塊乃中一換し銀砂利
 傀儡の寐乱髪をよりうら
 挿乃恨今世より事

瓜 厄 江 賀 太 江

翠簾鏡よおのちをぬら
 紅毛あも透く山魚のかみ
 新物く三里あまりハ完半
 積を右移れたりの曙
 あさるの侍合をち挿り
 いつくも秋の嘆氣あふく
 志川をりて餘善海で浦の舟
 移りりの出する古酒乃熟以

瓜 町 厄 江 賀 太

ナウ
 大さこの人よとさりぬ草如とん
 事やさぬ楯の表代をさす
 梁よ起よくとさるれ翁
 同ハ鈴麻のたすも来さる
 蒔ぬ間と杖曳花の都まき
 爰よ六人塙さる乃友

江 卮 太 瓜 賀 町

潮花樓真行

蓼太

秋風や薙刀はうさあさる後
 城かくやくと志るよりの月
 至の中ゆく丁の敷見えさ
 られ争際もむまろをなむけ
 爰かこ俄ありの雲ちまきれ
 以ハ田さえの志盛 ちり

蓼坡
 ト尺
 恭義
 五三
 故友

枝折戸ハあれど困死ナシと垂人
樽拵ニある 憾 講 中
夢かゝる 糸 合 ちの 後 故 事
飛 ち ち 君 々 名 々 々
く ち ち ち 糸 永 の 後 の ち ち 亂
茶 祿 日 乃 風 々 布 々 寺
片 枝 の 凌 骨 々 々 松 の 月
ち ね 々 々 々 々 々 又 八 石

坡 尺 三 友 尺 義 太 坡

け ち ち 々 々 々 駕 かく 抱 々 々 々
聖 々 々 々 不 二 の 雨 々 々
風 鈴 も 鳴 々 々 花 乃 忘 々 々 々
茶 不 々 々 々 々 杏 カラモ の 粥
大 名 々 々 の ち ち 々 々 山
祿 翰 々 々 々 眠 々 々 々
埋 火 の 聲 々 々 不 の 光 々 々 々
身 形 々 々 々 々 々 々 々 々

太 坡 三 友 義 太 友 三

又人々さう子の女乃ふささめ
 かいほくささく糸の行葵
 さをかりの糸髪を刺し推もせよ
 ささい入るある面のたへお
 めさ酒乃俵をほ使志よんせ中
 名よ遠き家のくさき、牛窪
 糸月のひりりとぬあまなり
 繰りさよせてねをささくえり

尺 坡 義 太 友 三 尺 義 太 友 三 尺

文やむまぬまをささくして唱子繩
 細くなりたるむり一街尾
 度きぬさ海潮乃袖をひるく
 玉くれをささく糸盤一面
 ほれくと日永き糸の路くし
 百々所用よ富る苗代

友 太 尺 坡 義 三

雪洞菴真行

蓼太

雪や月の星のと日和あは
 橋をたぐる魚をよまへ
 菜履小まきまを踏まへ
 いて半子年獲あれ
 二三尺圍炉裏の楯のよふたをり
 ささふまきまき雪乃志相中
 如帆
 亀洲
 阿人
 陽馬
 牛飲

此舟小下戸の藤のよき船はれ
 懐病神や襟小はきまむ
 四つ五川まき日の藤分限
 心とゆりれよ襟乃出をの里
 顔平髪物むつまきまき
 蓬足よまきまきのよ一系
 三日月を鞘のさくら乃小船
 陸風呂好き乃まきまきのよ
 夫水
 洲
 帆
 太
 人
 馬
 飲
 水

門前の秋も旅子智恵院
 大工を急ぐ拍る速い見
 花のまよひぬらひ流るゝ小波海
 追々特乃うた子やひささ
 十
 簪のまよひぬらひ春の雨とまよ
 今海舟人ゝ我もたむひく
 飯橋のわらふも瀬川とゆゑ
 年は稀なる言集乃まれ人

洲帆太人馬飲水洲

うなむゝ小天眼鏡をさゝかあ
 荷と小妻乃南がえさ
 もももゝと鶯むゝ八重子
 世哉西位とゑんて六位子
 双葉おくす河ひきのまられと
 由法進くハ雲のくもも
 風さるる月より下乃落走く進
 銀河流る希ききの洲

帆太人馬飲水洲

盃^{ナリ}を^{ナリ}て戻る盃の盃あらしひ
 吐とを^{ナリ}なり^{ナリ}尼乃年古ろ
 多^{ナリ}きと^{ナリ}喜^{ナリ}ぬのかよ^{ナリ}翠^{ナリ}簾^{ナリ}屏^{ナリ}風
 旭^{ナリ}年^{ナリ}む^{ナリ}よ^{ナリ}桃^{ナリ}子^{ナリ}か^{ナリ}を^{ナリ}け
 右^{ナリ}や^{ナリ}くと^{ナリ}花^{ナリ}の^{ナリ}水^{ナリ}慶^{ナリ}乃^{ナリ}扇^{ナリ}を^{ナリ}ま
 一時^{ナリ}よ^{ナリ}来^{ナリ}る^{ナリ}东^{ナリ}風^{ナリ}の^{ナリ}初^{ナリ}との
 執筆^{ナリ}人^{ナリ}洲^{ナリ}水^{ナリ}飲^{ナリ}太^{ナリ}

振々亭真行

十三夜

盃^{ナリ}満^{ナリ}る^{ナリ}月^{ナリ}を^{ナリ}忘^{ナリ}き^{ナリ}き^{ナリ}名^{ナリ}流^{ナリ}は
 鶯^{ナリ}と^{ナリ}み^{ナリ}き^{ナリ}う^{ナリ}あ^{ナリ}う^{ナリ}ま^{ナリ}の^{ナリ}秋^{ナリ}
 美^{ナリ}ち^{ナリ}の^{ナリ}秋^{ナリ}の^{ナリ}花^{ナリ}摺^{ナリ}統^{ナリ}を^{ナリ}て
 太^{ナリ}刀^{ナリ}持^{ナリ}ひ^{ナリ}り^{ナリ}側^{ナリ}さ^{ナリ}し^{ナリ}ん^{ナリ}之^{ナリ}
 福^{ナリ}ち^{ナリ}向^{ナリ}き^{ナリ}嚏^{ナリ}あ^{ナリ}る^{ナリ}鼻^{ナリ}を^{ナリ}ら
 海^{ナリ}貴^{ナリ}り^{ナリ}流^{ナリ}る^{ナリ}海^{ナリ}氣^{ナリ}を^{ナリ}この^{ナリ}水^{ナリ}
 鳥^{ナリ}駱^{ナリ}太^{ナリ}武^{ナリ}鳥^{ナリ}三^{ナリ}駱^{ナリ}蓼^{ナリ}太^{ナリ}

言ふことと詩題との冬と和
ま由律法乃相識はさあひ
傘控も定ひとさく既破きて
元此史婦まきま念点も字
破り後のやま道し無傷き
御子と寂しよ鳩乃夕くれ
十六おれ月まの法華深き
翁和尚の糧と八束穂

太 鳥 駱 太 鳥 駱 太 鳥 駱

何しよまらるしよ今自強
牛込繫るき世を記入らる
若ひら花のまら子抱まら
園ちりくふちり日一輪
風もむ帆も十分小ま袋
強も似るま阿羅漢の神如
さねらぬる語もあひ入
深本も朽れ疾小くれく

鳥 駱 太 鳥 全 駱 太 鳥

摘めしとあまの月影も
夏の三とせし仙境なる
川さく人種と破れし
湯るものとあまの具津さ
死にても纏る巨魁乃老ら
うなりとあまの院巻を
昔むしとあまの湯あき
御人らぬぬ種を
全太鳥駱太鳥駱

意しつとあまの月影も
おあしとあまの院巻を
雲の遊月をよく錦歩障
着るものとあまの具津さ
死にても纏る巨魁乃老ら
湯るものとあまの具津さ
川さく人種と破れし
湯るものとあまの具津さ
死にても纏る巨魁乃老ら
うなりとあまの院巻を
昔むしとあまの湯あき
御人らぬぬ種を
全太鳥駱太鳥駱

小十衛三ノ様
成三ノナリノ
上ナリ

御大鳥駱太

全太

芭蕉菴真行

蓼太

杜若指越さるる嘆りりり
 善く藤よとて御所は曙 月知
 鯉乃尾小虫の上はさるる種言
 羽織と匂子葉少の折く 全
 月よまゝい連一室貸さし柳枝 全
 聖々の氷乃今またく 知

紅葉さる深林は揺さされ 全
 此情ゆきし歌多おのあ 太
 何某乃京家女さるる持る人 知
 回柱は揚子乙女百人 太
 媚らふる上はさるるにほはら 知
 大姐板小執費乃さる似さる 太
 月程さるる遊治乃揺る 太

醜りゆかかきと跡多しと
拙者を尺紙に入さきき
宗角と花は和く九折
櫻三強小茶屋の糸ゆ綿
鶯も化さきき通ゆるうら帯
まの相壺は意能開に
砂粒ゆ小瓶の茶籠る巻あり
うら雅き鳥の如き遊殿
和 太 知 全 太 知 太 知

逢下葉嵐のゆらら松のつぎ
うな篠を乃はうり山伏
襟垢能もれ積ひとの譲あむ
酸さめむもことくつま鑑あり
ほの流るる南風の梅乃父さき
豆出き飛ても次十の月さ
如きよま扇持るり指さき雪
外科は次身をそあもゆさ
大 知 大 知 太 知 太 知

古樹より芥のぬきし物とせ
 貧乏守の移轉さんく
 夏之腐花は味香を返せる種継
 日無とあつとらふ年午乃因兩
 花はくまふあつとらふ咲とらふ
 後とらふとらふ春のあふ上
 太 知 太 知 太 知

雪午園真行

蓼太

縁の日を吉祥園ふ忘れき紫
 浮世哉余は冬孤山松 黙我
 三川居つ花風品揃る穠ふけて 鳩喬
 まゝに初地入るとは法とらふり之 山奴
 幸あれとあつとらふ月の教龜 我
 羽城よりあつとらふ櫓乃秋のせ 太

小車の花乃敷を葉ゆ〜
 倚く藤おの壁斗屋か〜
 衝立は奥と志山不睡虎
 姉りよあつ〜
 曲一手鄙踏乃朋よ〜
 物よ〜
 武士の初家八懐乃月多〜
 秋さ〜
 奴 喬 太 喬 我 太 喬 奴 喬

空癖小壘從解とほ〜
 け〜飯の著控〜
 追風ま〜
 先年園ある雛乃送荷
 篠付〜
 難細〜
 酒臭〜
 ま〜雪搔ぬ市の細〜
 我 喬 奴 太 喬 我 喬 奴 喬

船起と希小本格子中格子 我
 控子子親とととととととと 太
 動とととととととととととと 喬
 とととととととととととととと 我
 埋井とととととととととととと 太
 人改不城のいさしはひ 奴
 死はとととととととととととと 喬
 五つりよとととととととととと 我

縁く小塔とととととととととと 奴
 世中練氣形白温谷街道 太
 姉とととととととととととととと 喬
 挽葉たくとととととととととと 奴
 面本の折良敵とととととととと 我
 新とととととととととととととと 執筆

古藁堂真行

蓼太

名月孤照あそ遊る阿曾りり祭
 吐柳
 回踏伸よふ芦の穂うき
 秋風年祝式なるる芥らら物言
 啄雉
 烏帽子つき能親もそり
 太
 母へのり望相とえ日小明とそ
 柳
 道あそりま市の喜陽
 雉

鞆當と風和らふあ介らら心
 太
 梅了れ七能と柄多ひく
 柳
 志とあ即と悟らふ相居の女房達
 雉
 いてや男入あそと女さ舞
 太
 子ハと牛と蓼とらふ日年
 柳
 山岸とと人史の阿も男を
 雉
 ころり小昔と祝をさるる
 太
 廓うり賃能目利ありく
 柳

云傳とにゆく川のくさり船
 秋をあらはれよ月乃程芋
 孝ひ小胡条ゆき条の花ゆき
 板家とくくしあゆ降之
 芥モイイ此本此乃秋小何しり
 新羅の使志くあさひ
 此後終るゆきく投る人
 夏を吹ぬくむし一坂本
 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁

舟君乃史の楫とるる
 醉醒ささるる年古步
 阿者志くむ書えん論るまほ
 後さみしとやるあらん
 事もてぬめしと文を後あひ
 唯今夏年くた麻の富士
 富士能るるされと能ぬる月の富
 後の給り鳥丸との
 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁 太 雁

十七
 若くと色楽子居る秋の雲
 聖子長官の琵琶絃人
 朽く空軒をぬく香能雨
 都く山に暮る十日居住を
 遠山とる一の空く一花の露
 朽くく強ふまをさつ進
 太 雉 柙 太 文 雉

桃花窗真行

蓼天

年と遊とち空居るの居能月
 麻酒く山より香くの秋
 繪襖能居能繪ふ花建之
 列々世を居る太鼓子千々
 湯底の小局は浴衣赤とおり
 出せしと空を端立てるあり
 十牛 湖堂 洗水 牛 堂

9
控持おの隈もを柳一おとら垣
能ももと所いほ家入迄まる
持向う持能き心の小薙刀
あーいそさる雪能門口
ふのくとあ能炊まをりこの能
後をらくと西月をなま
川いけき今や月降木城山
瓜一うら玉有能義理
太水堂太牛堂太水

10
おのちを室中ありののちを
とちあーあーとら三八
おのち一お親子と花入通一駕
まをハ踏ん松のまゝ濱
夏をうらあるもさる日の御扱
嗽^{ウカイ}年^{ウカイ}踏能の歯あゝくド
うーあうな後持くま出
毎あゝらと文る九つ
太水牛堂太水牛堂太水

竹くーねの刀減む
 母のふ髪乃を磨斗よと
 伝信のうは戸の暖簾をさるせ
 風起るのふとすしと
 赤筆の論。大工の豆仕舞
 舟と陸との詞多し
 冬うけく又夏すの種ふ祭
 稻妻をさす月の下前

午 堂 水 堂 牛 堂 太 牛 堂

旗くともうま相撲の白禪
 編瓦二本所く飲る
 竹控一冊題入厨品を
 泊馬の板をひえぬ
 是泊入大船に板をさる
 百姓控子睡月むは

牛 堂 水 堂 太 牛 堂

執筆

雲地菴真行

雲地菴真行
一 舞詩子袖手菊酒
某之尻と利之尻とゆれさるゝ
肩を細とと梅磨り
舟實の海も岩も来拈

蓼太
雪珊
子交
普成
太珊

秋風まを花の道を追ひ
此程海も此之さめく
とやとて 則ち連のゆり
文を揚尾のより 契付
何れも此方と係るもの
立ても物冷し 挿入の如
風雪も此程痛き旅を
川もぬれ我理の世に一日

成文 珊成 太珊 交太

交 換 側 之 意 也 宗 字 孫 音
 射 揚 乃 的 不 花 の 友 々 々
 細 々 々 移 々 々 月 乃 夕 暮
 ま 々 々 如 々 々 山 乃 天 雲 音 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 句 當 々 々 々 孫 袖 袂 古 衣
 花 表 々 々 々 夏 衣 々 々 々 々 々 々 々
 皆 孫 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

太 成 交 珊 成 交 珊 成 交 珊 成

孫 波 女 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 煩 惱 則 の 談 々 々 々 々 々 々 々
 掃 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 輝 虎 乃 魂 在 々 々 々 々 々 々 々 々
 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 浪 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 耳 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

太 成 交 珊 成 交 珊 成 交 珊 成

ナウ

折^{ナウ}ゆと帳場事の各
 日のく^{ナウ}て^{ナウ}る^{ナウ}熱入る^{ナウ}まを
 報^{ナウ}後^{ナウ}を^{ナウ}し^{ナウ}る^{ナウ}度^{ナウ}了
 砥^{ナウ}列^{ナウ}を^{ナウ}ま^{ナウ}じ^{ナウ}く^{ナウ}松^{ナウ}入^{ナウ}根^{ナウ}より
 河^{ナウ}端^{ナウ}を^{ナウ}結^{ナウ}文^{ナウ}花^{ナウ}の^{ナウ}玉^{ナウ}津^{ナウ}山
 早^{ナウ}く^{ナウ}山^{ナウ}を^{ナウ}く^{ナウ}た^{ナウ}甚^{ナウ}入^{ナウ}あ^{ナウ}る^{ナウ}は^{ナウ}能^{ナウ}
 交 成 太 交 珊 太

芭蕉菴真行

古^{ナウ}仲^{ナウ}の^{ナウ}ま^{ナウ}は^{ナウ}く^{ナウ}く^{ナウ}下^{ナウ}葉^{ナウ}の^{ナウ}那^{ナウ}
 魅^{ナウ}不^{ナウ}乃^{ナウ}の^{ナウ}小^{ナウ}昔^{ナウ}能^{ナウ}む^{ナウ}ま^{ナウ}き^{ナウ}井^{ナウ}
 記^{ナウ}の^{ナウ}あ^{ナウ}ま^{ナウ}き^{ナウ}入^{ナウ}後^{ナウ}石^{ナウ}の^{ナウ}際^{ナウ}まで
 旅^{ナウ}の^{ナウ}ま^{ナウ}き^{ナウ}く^{ナウ}旅^{ナウ}と^{ナウ}ま^{ナウ}つ^{ナウ}ま^{ナウ}
 大^{ナウ}く^{ナウ}の^{ナウ}影^{ナウ}費^{ナウ}の^{ナウ}ま^{ナウ}き^{ナウ}月^{ナウ}の^{ナウ}秋^{ナウ}
 あ^{ナウ}く^{ナウ}の^{ナウ}ま^{ナウ}き^{ナウ}強^{ナウ}る^{ナウ}ぬ^{ナウ}る^{ナウ}麦^{ナウ}
 白
 安房 吏鳥 羽白 翠翁 侘笈

藜太

安房

吏鳥

羽白

翠翁

侘笈

白

云々... 松の小屋... 白... 太... 籬... 笈... 音

昔々... 舟... 白... 籬... 太... 籬... 笈... 音

秋杖小籠より熟とるもあはれ
 筆俵のゆき子に相いあはれとも
 ちやうどおなじ針所の子粒の音
 摘抽きよしく合式めめく
 昇るをよきう出さかくや
 琴集むくの急の指も
 吳中とよきうして海を忘れ
 秋の風をうけつとあつ
 白 太 後 魯 白 太 後 魯

為る方より申さるる筆俵も
 二七子まで果ぬ後風記
 泣き人よふ妙をよきうして
 正月觸の熟をうけつとあつ
 不栢子を伝へて花の物
 をもくらく年百も
 執筆
 白 太 魯 太 魯 太 魯

芭蕉菴真行

蓼太

足小柄をく其のくちを袖に

下巻

遠く大の海をさへく

蓼醉

梅菊持陽に切をさへく

鷺泊

月と油のの松のわく

青牛

喰ひて西瓜の種を掃きり

汶上

山廻り船の稚子をく

太

葉舟のきこく大堰桂川 牛

帯を流るるもり音子 泊

ひみち中葉を扱鹿に枝 太

懺法海一夜の夕くき 上

望人を詠くさやひにき 碁

五尺の莖草をさし川を 牛

ちやくとくを流るる月 上

例幣をく飯を欠に急 碁

好もぬ秋の庵とありあけき
 追く入る。振舞入禮
 道日習ふし。おちあがりて花の香
 蝶年足入る。はくま。おれ
 + 道日習ふし。おちあがりて花の香
 さく。振く。おちあがりて花の香
 拭もぬ。おちあがりて花の香
 佛。餉。入る。おちあがりて花の香

牛 太 泊 上 太 泊 上 牛

六月の夜。おちあがりて花の香
 うさ。おちあがりて花の香
 振もぬ。おちあがりて花の香
 おちあがりて花の香
 おちあがりて花の香
 おちあがりて花の香
 おちあがりて花の香
 おちあがりて花の香

泊 上 太 牛 太 上 牛 上

新艘の流るも拂ふ意なきあり
志正西より宇佐の下祿宣
油取ぬ阿そら扇乃結賀付
多尺よ晴まじ、魏 結さるる
し帯もろろ舞は揚巾 忍持るる
粧のやせんと古ま見えろ
新風より僧馳急る 安古論
押やまじる。 破さし 糸との

本 和 枝 太 蓼 本 和 枝

阿のり (おのり) 花の舞うけ
長き舟 舟の 花の舞うけ
甚乃月眉より君をなほぬる人
秋く風中 想おもはるる
おのり 流の袖もむふ 養むる
をこ小く 了 陵 結さるる
臨雲より 舟の 後
口 舟の 舟の 舟の 舟の

太 和 本 枝 太 枝 蓼 本

上

上

妹ふりの涼く舞くくふ良き扇
無なきと長と推不軸
盤と皆尾首の阿達きあ強
掛棹とくふ山依の雲
盤とつと推阿やのしるふ紙
きくしふふと孔熟柿喰こよ
手推くかふきく押き月舟
所と推籠のあふ門く
和 太 枝 太 本 和 枝 太 和

^{ナリ}かけ合ふ望みの秋に
是ハ濃茶と玉のくちら
百々守れぬもの果ぬ華嚴宗
名のこちの推き細き依保川
地と葉想をくハ世の雲
熊子何れくハの籠こり
和 太 枝 太 本 和 枝 太 和

芭蕉菴真行

蓼太

玄妙や抱きさるる控ありき
 むき物思ふき 牧の日記中
 雷りもさるぬるる不降言
 風呂沸るもを旅のよまら
 厚くおろくもをいふも此竹魚
 廣まてし届くも我入初年

下巻
 梅翠
 岷江
 雷芥
 雷如
 江

言の形さるる世々人々の一かけ
 脊中を託まよふ子ささやく
 侍るも言真能象乃きの子さ
 此母年々廉厚風も五双あうて
 垂沙又老の福川あつら
 浪立せしと悟氣をこめる
 狭葉小まつくも此月文さ
 宇治の堂能脊戸門可死

翠
 如
 芥
 太
 江
 翠
 芥
 太

尾ふへつ申あつたあのをの客
 きく一由と聲とさきく結る
 幕越の母礼と花あをひん
 人さふくふ江戸春八
 立海さふの月尺と花筆けめ
 自ささきあや十の由さまで
 お筆八今あさきあぬ神の書我
 焼場とさきくは結るおさか
 江如 翠 芥 芥 芥 芥 芥

ねとあつたあつたあこの梅乃音
 鴨むきのつるあつたあこの江
 月あつたあつたあつたあつた
 明ささきくは結るおさか
 立海さふの月尺と花筆けめ
 自ささきあや十の由さまで
 お筆八今あさきあぬ神の書我
 焼場とさきくは結るおさか
 江如 翠 芥 芥 芥 芥 芥

三十一

三十一

世に中を食ひてあつて階にそ
 多しつゝいゆつゝいふ言ひに新電
 早中しちかきいふ言ひに吉下子
 野らとふとふかく桃の節日
 曲るゝ花の瀬津瀬せき入ん
 那一年ちかきとふ別花乃去
 如 翠 芥 太 江 執筆

芭蕉菴真行

踏を山を色之如之筆の松
 巢ちち年立たれ月能親露
 一とくや如き言ひ能釣よき
 や多しつゝ小旅の泊ささめ
 入梅晴方屏風かこく法然
 能もつゝ言ひ能言ひ能言ひ
 如泉 安房 龜泉 花六 雨竹 圓志

嘗^ウ子^ウを^ウお^ウ子^ウ人^ウ
非^ウ的^ウの^ウ序^ウふ^ウと^ウし^ウの^ウ筆^ウ
少^ウく^ウの^ウ書^ウの^ウ者^ウを^ウ毎^ウ夜^ウ物^ウ志^ウを^ウ
宿^ウ物^ウ衣^ウを^ウ母^ウ之^ウの^ウ鬼^ウ
を^ウち^ウく^ウと^ウ時^ウ毎^ウ漏^ウる^ウ阿^ウを^ウ四^ウ
簾^ウ或^ウ千^ウく^ウよ^ウる^ウく^ウ庖^ウ丁^ウ
自^ウ拭^ウの^ウま^ウの^ウ口^ウを^ウの^ウま^ウ本^ウ海^ウ賣^ウ
定^ウう^ウ自^ウの^ウ顔^ウを^ウさ^ウし^ウを^ウん^ウ
泉^ウ 竹^ウ 志^ウ 太^ウ 六^ウ 泉^ウ 泉^ウ

伽^ウ羅^ウ利^ウの^ウ碑^ウを^ウ吹^ウき^ウ押^ウ越^ウ
あ^ウハ^ウ露^ウ鞠^ウの^ウ足^ウ花^ウ根^ウ藉^ウ
う^ウと^ウ飛^ウび^ウの^ウま^ウの^ウ書^ウの^ウ者^ウを^ウ毎^ウ夜^ウ物^ウ志^ウを^ウ
久^ウし^ウい^ウ老^ウ乃^ウ持^ウ葉^ウ高^ウ心^ウ
結^ウ的^ウの^ウま^ウの^ウ書^ウの^ウ者^ウを^ウ毎^ウ夜^ウ物^ウ志^ウを^ウ
明^ウら^ウん^ウら^ウし^ウは^ウ禮^ウ儀^ウを^ウ出^ウら^ウす^ウ
卯^ウ塔^ウを^ウ志^ウを^ウく^ウと^ウ子^ウを^ウ如^ウ也^ウ
蛇^ウを^ウ就^ウ乃^ウ三^ウ日^ウ六^ウの^ウう^ウ
竹^ウ 六^ウ 太^ウ 志^ウ 六^ウ 竹^ウ 志^ウ 六^ウ

御後とまじけの君と取らや
毒ハ毒とと佛と取らふ
飯粒を取らふ米を炊くを
内造作のまじ 鉦屑
少長々雷ゆり 跋京のゆり
かさーとゆふ ぬ染一日
山霜にまじけとととと
看まよまよとととと

泉 六 太 志 竹 泉 六 太 志 竹 泉 賤

^十
あそびと我とあふるの九裸
むーろ帆とととと風乃舟
細川伝をたのしくぬむる鳥
まよとのまよけとととあり
かたて度ととととととととと
あそびと風ととととととととと

泉 太 六 賤 竹 志

主の字に於ての「主」は「主」の音に「主」の字を
 集めて「主」の字を「主」の字に「主」の字を
 後の「主」の字を「主」の字に「主」の字を
 主の字に「主」の字を「主」の字に「主」の字を

以不法を一字と流し主生の様
 時々花の般急波舞密
 芝根より砂粒より如也
 鉄炮よりせきく如より就き
 無と月の如くくくくくく

夜兔
 全太全
 全太全

ありこは如ぬ園に鬼打
 ありの字を客に如魂のまのま
 人形よりく如き如との
 錦木に如き如き如里なるを
 庚申塚を宮の柱に如
 捕縄小牧に如きみく如あひ
 主の字を「主」の字に「主」の字を
 探幽の秘より布袋より雨の如

兔
 太
 兔
 太
 兔
 太
 兔
 太
 兔
 太

兔 何れも高山のあや
 太 徳合とて家と縁との誓借さ
 兔 文くろたるゆふ月能る
 太 釣竿の折くさく浦の秋
 兔 一 芦乃穂よちハ越ても
 今 望くのも葉漬かんとする様さ
 太 付斗をいしきく文の
 兔 隨灌能再さるる小雲さるる

太 よかぬ首尾の三日つた
 兔 朝早吹くし流あはれ妹春山
 太 湯とちあふふと愛回神元
 兔 恋ふあもさるる麻子のああき
 太 休る隙を故望 志さるる
 兔 蕪蓐よ合衆の紙を喰メ
 太 比庫乃あは文さるるさ
 兔 物習ふさるるし 能月よ筆硯

家より玉あり歌七曲に
内又能通し里部と名前の多
とくく在曲なる貴くある
難し七曲ハ何そいふ能る
其曲風より炭俵の風浦小
玉とくくあるとくく
系能通し多を能く

二百五

三

この際の工を借し順たしと
 されれば餘り餘り不たさる
 至るゝ業なきり全都あり
 海一、白門の隆く種りてを
 解る只其終里中、余所能
 おすゝゝ志ありふ而已

玄峰
 魚文

蕉門俳諧書目録

蕉門俳諧書目録
 三世雪中庵明和の頃まで
 の撰りありむ 二冊

同 二編
 初編より残る安永中と
 の句集 二冊

同 三編
 二編に残る天明七までの
 句とて 二冊

夏百歩集
 蕉老先生夏中の集
 文章後句あり面白
 けり 一冊

七柏集
 雪中庵蕉老太著
 歌仙百廿章 四冊
 時代変化の神成獨吟の歌仙
 集一も趣との人先中著述あり
 の中宵一の書より俳諧と志あり
 人のうちどんぞに書る

書林 文刻堂西村源六

雪門七部集 七冊
 附合の考選者抄と集
 三のより成ありと
 山幸著

新集引集
 中集より引集と全記去
 題と奇あり便利の
 蕉老著

去燻去砂歌
 蕉老著

住吉千句
 蕉老正月夜念三先生の
 十部約を附合の海澄
 あり

墨水西行
 雪門蕉老の今隅思
 洋の撰りあり

百羽句
 蕉老先生独吟の意の
 而約あり

底世三歌仙
 蕉老著

秋の夜
 不玉の歌仙と成海の
 評あり 完末著

探荷集

雪門言兵秀逸の
数句集より

初編二巻 三巻 莖太著
四巻 妻夏 莖太著 秋を完末著
五巻 六巻 完末著 共七冊

附合小鏡

莖太選 小本 一冊
牛宗著

三知の輝月 再のり 莖太のり
そ外附合の便り 再のり 故人の語と
あしき 再のり 加をす 再のり

炭のふり

莖太選 小本 一冊
三巻著

炭のふり 方 越面とらること
総ての葉の一助を 再のり

七巻さぐり

莖太選 一冊
莖太著

芭蕉翁七巻集の中 詳り 再のり
門人の問に 再のり 再のり 再のり
七巻の側は 再のり 再のり 再のり

三吟未素記

芭蕉其角嵐重三師の
哥仙 莖太著 一冊

歌法

宋世五葉の解 統
乃の提り 莖太著 一冊

芭蕉庵再興集

莖太著 一冊

三巻日記

日 留奇仙有 一冊

筑波日記

莖太先生文章 後乃
嬰兄著 一冊

秋山家

葉紅系 歌仙
夜免著 一冊

附合高野集

三巻著 小本 一冊

蓮華會集

莖太著 表合 四季 後乃
先生五月雨の句 程 叙南 詩文 章入

雪門報恩集

完末再訂
全二冊

十三条

附合炭のふり 再のり 再のり
のり 再のり 再のり 再のり

花かんす

正花 純花の半 瓜 妻
あま 日述

桐さし

月との合 門人 留奇先生
自著 再のり 再のり 再のり
書 再のり 再のり 再のり

ぬちあも

莖太居士 留奇の記を
門人 留奇 仙有

更豆の集

二世 留奇中庵 留奇人の
二巻

電戸 扱草類題集

完末先生
再選

當時雪門 法名家 秀逸の句 沢
敷 再のり 再のり 再のり

心

文母著 三冊

雪のさそち

阿人著 三冊

惑回珍

再のり 再のり 再のり
再のり 再のり 再のり

吐月集

附 扱草 留奇 留奇 留奇
子 留奇 留奇 留奇 留奇

其角句解

留奇の句 留奇の句
留奇 留奇 留奇 留奇

三編の面

完末著 表合 扱草 章入

莖太文集

完末著 近刻

俳諧名数

懐中本 一冊

以善ハ後分付合文章草を小入用の品
天門地理名との土部より付く七夕の
七娘ハ天門の教あり地理を法雲の八家
人変えハ年賀の笑名秋門ハ忌日の
笑々茶を外さくハの年賀あつハ他世
夷曲より付くハ雅進工役職する人の
主位のかなり

さる歌

古涼著 折々 一冊
去極歌中より一冊
の一助と云

くさひ大全

目 五甫著 一冊

此書ハむらより取板あり身と云
他ハ手れハ授合紙正ハ寔ハ流ハ
の難澄なる

毛吹州

七冊

四季名上げ

季五紙合ハ一冊
小本 一冊

右ハ外俳書類何れもハ使入重ハし以月希ハ

西村源六

かた紀行

とを紙翁著
梅人行 一冊

つきく集

同去間の紀行
梅人行 一冊

芭蕉袖双紙

小本 二冊 近刻

翁一代の付合紙悉くあり

いろはきり

冬山坊支元著
四十八字まきれまより
能ハ紙出

冬山文庫

支元先生の文章
紙ありハ折々

俳諧御集物板行仕立

○ 同法摺とハ妻帖の板板行

○ 右法摺有ハ前ハ用ハ使付てハ
出集揚直致ハ版中ハ働ハ以上

俳諧書舗

江戸本石町十軒店

西村源六

